135-1　樋口一葉「たけくらべ」から三ノ輪商店街へ（8km）

樋口一葉の「たけくらべ」の舞台である竜泉町界隈から、下町の情緒を残す三ノ輪商店街へと向かう。

樋口一葉　　回向院　鼠小僧墓

【道順】

JR 上野駅谷中口→上野検車区と踏切→（玉川兄弟の墓　聖徳寺→）伊能忠敬墓・高橋至時墓など　源空寺→（几号水準点　金杉三島神社→）花園通りから吉原弁財天→吉原神社→酉の市の鷲神社→航空安全の飛不動→一葉記念館→新吉原・大門・見返り柳→六地蔵の東禅寺→天ぷら伊勢屋・桜鍋中江→目黄不動尊の永久寺→投げ込み寺の浄閑寺→小塚原刑場跡と回向院→彰義隊ゆかりの円通寺→三ノ輪商店街・都電三ノ輪橋駅

【街歩き解説】

・上野検車区と踏切：上野検車区は、東京地下鉄銀座線の車両基地である。入庫線にある踏切は、軌道側も遮断する軌道遮断式なのだとか。日本の地下鉄で、軌道遮断式踏切はここのみであり、軌道側の遮断が自動であるのもここだけとか。なによりも、本線ではないものの地下鉄に踏み切りがあることさえ珍しい。

・玉川兄弟の墓　聖徳寺：玉川上水開削者で有名な玉川兄弟は、束にした線香を竹竿にくくりつけたものや提灯の明かりを利用して夜間に測量をしたといわれる。

・伊能忠敬墓・高橋至時墓など　源空寺：「大日本沿海実測全図」、いわゆる「伊能図」を

作成した伊能忠敬の墓の隣には、師の高橋至時墓、そして谷文晁墓・幡随院長兵衛墓もある。

・几号水準点　金杉三島神社：明治初期の測量は、英人マクヴィンなどの指導で実施されたことからか、水準点にはイギリスでも使用されている「不」状の記号を石柱、華表（鳥居）、石垣、欄干などの構造物に刻んだ「几号水準点」が使用されていた。
　明治期に三島神社の玉垣石柱に刻まれたものは、今は敷石になっている。

・吉原弁財天・吉原神社：吉原神社は、1872 年（明治 5 年）新吉原四隅に祀られていた稲荷祠を合祀し、吉原遊郭の鎮守として創建。その後、弁財天を祀る吉原弁財天祠を合祀した。 辺りは元来湿地帯であったが、新吉原が造成されるにあたって、沼沢を寄せて池を形成した。遊女逃亡防止としても機能していたが、1822 年（大正 12 年）関東大震災に伴う火災で逃げ遅れた遊女らが、弁天池に飛び込み 490 名の犠牲者を出すという悲劇に見舞われた。関東大震災の犠牲者を悼む観音像が残る。

・酉の市の鷲神社：ご存知酉の市は、酉の日の午前零時に打ち鳴らされる「一番太鼓」を合図に始まる。十一月に酉の日が二回ある時は二の酉、三回は三の酉といわれる。

・航空安全の飛不動：この寺の住職が、ご本尊のお不動様を背負い、はるばる大峯山まで運んだ。そしてある日、ご本尊が留守の江戸の寺にお不動様の分身を携えた人々が集まり、お不動様を観想し一心に祈願した。すると、お不動様は一夜にして大峯山から江戸に飛び帰り、祈った人々の願いを叶えて下さったとか。それ以来、「空を飛び来て、衆生を守りたもう、お不動様」飛不動尊と呼ばれるようになったとか。今では旅行安泰どころか、航空関係に携わる方々の参拝も多いのだという。

・一葉記念館：「たけくらべ」の樋口一葉は、24 歳の生涯で 15 回の引っ越しをしている。その一つが本作品の舞台となった竜泉町である。ここで一葉は雑貨店を営んだが長続きせずに、本郷丸山福山町（現西片）に転居し、14 か月間で次々と名作を残した後、短い生涯を追えるのである。旧居跡は、記念館南を東西にのびる通りあたり。

・新吉原・大門・見返り柳・天ぷら伊勢屋・桜鍋中江：江戸幕府開設間もない 1617 年、日本橋葺屋町（現在の日本橋人形町）に遊廓が許可され、幕府公認の吉原遊廓が誕生した。「吉原」の語源は葦の生い茂る低湿地を開拓して築かれたためという説がある。明暦の大火（1657 年）で日本橋の吉原遊廓も焼失。周囲の市街化が進んでいたことから、浅草田圃に移転を命じられた。以前の日本橋の方を元吉原、浅草の方は正式には新吉原（吉原）と呼ぶ。

大門は、吉原歓楽街への正面玄関。治安目的は勿論、遊女たちの逃亡を防ぐため、出入はこの大門一箇所のみとされた。江戸時代には黒塗り木造のアーチ型楼門が建設され、明治期には2代目となる鉄門が築かれたが、1911年の大火で焼失した。

遊郭・吉原のこと

日本の都市で「日本のヴェニス」と呼ばれているところは一つや二つではないが、江戸にもそうした呼び方ができた。江戸の町にも、自然の川ばかりでなく人工の運河が網の目のように走っていて、吉原に行くにしても、いちばん気持ちのよいのは舟で行く方法だった。

文明開化が吉原をはじめとする遊郭にもたらした最初の変革は、娼妓たちの「解放」ということだった。それは、マリア・ルース号事件の直接の結果だったらしい。

ペルー船マリア・ルース号の船長は、奴隷、特に中国人苦力を使っているという廉で、横浜の裁判所から有罪の判決を受けた。ところが、ペルー側はこれに反訴し、日本人自身も奴隷を売買している、その主な商品は遊郭の女たちであると。こうして娼妓は法律的に「解放」されることになった。

解放後、妓楼は「貸座敷」と名を変えて危機をしのいだ。女性たちは、名目上はあくまでも自由で、鑑札を受けた家なら貸座敷を借りて商売することができたのである。その結果、貸座敷のある色街が、品川、新宿、板橋、千住、それに吉原、根津の六ヶ所に出来た。

江戸の芸者と花魁はそれぞれに別の役割を分担していた。芸者は宵のうちに歌と踊りを披露し、夜が更ければ花魁の出番になる。明治から大正へと進むにつれて、遊郭の芸者は次第に衰え、遊郭以外の芸者の方が盛んになる。遊郭はただ色を買うだけの場所になってゆく。高級客は料亭に出かけて、芸者を呼ぶようになる。

花柳界というのは、李白の詩句に由来し、花街の女性を花と柳に譬えたものだ。やかましく言う人は、花は遊女、柳は芸者を指したというが、実際は曖昧なもので、芸者という定義さえもよくわからない。

さて、金のある客でもいきなり（遊郭に）登楼することはなく、まず茶屋に入って、そこで手筈を整える。その引き手茶屋に変わって盛んになったのが「待合」である。客同士が待ち合わせて準備をするところを指したが、そのうち、客が芸妓を呼んで遊ぶ「待合茶屋」の意味になり、芸者の呼べる「料亭」を指すようになる。このころには、花柳界といえば、料亭街や芸者を意味するようになる。

明治14年春、桜の花も真っ盛りのころ、（吉原に）新しい大門の竣工式が行われた。門柱には福地源一郎の（桜痴）の筆になる聯（左右の柱への刻み）が浮き彫りにされていた。福地は、「東京日日新聞」主筆、東京府会議長である。

明治43年の大洪水、明治44年大火。4月9日、あと1日で新しい鉄の大門が竣工して満30年になろうとする日、吉原は壊滅的な被害を受ける。数百軒の妓楼と茶屋のうち、実に200軒が焼失した。

そして根津、明治の初めには不便な所であった。ここに帝国大学ができてからは、こんな近くに遊郭が

あるのは不適当ということになった。なにせ帝大の学生といえば、日本の将来を背負って立つべきエリートである。誘惑から遠ざけておかなければならない。少なくても、歩いて行けるような距離にこんな悪所があっては困る。そこで、明治 21 年、根津遊郭はそっくり洲崎に移されることになった。

日本で救世軍の活動が始まったのは明治 28 年だが、33 年にはアメリカ人の救世軍大佐が来日し、吉原の娼妓たちに廃業を奨励する冊子『ときのこえ』を発行して、呼びかけに応じた女性たちを救護すると訴えた。妓楼の経営者たちはこのパンフレットの買い占めを試み、街頭で冊子を売っていた救世軍の日本人兵が、吉原の用心棒に襲われる事件が起きた。また、洲崎遊郭から女性を救い出そうとした二人の男も襲われた。

ついに新聞記者の一人が吉原から情勢を救い出すことに成功するにおよんで、遊郭からの脱出がほとんど流行のようになった。･･･救世軍の発表では、数か月の間に 1000 人以上の脱出者があったというが、やがて流行も去り、成果を上げることはなかった。

そして、昭和 33 年の 4 月 1 日売春防止法が施行される。

見返り柳は、遊び帰りの客が後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ振り返ったという。現在は跡地に石碑が建つ。すぐ後ろにある柳の木は昭和になってから植えられたもの。

吉原土手は、現在の土手通りに平行して山谷堀があり、堀を船で通う遊客も多かった。堀と通りの間が土手になっていたが、現在では取り崩されている。日本堤はこの土手を指したものである。その土手に、東京大空襲の被害に遭わずに今もなお残っているのが天ぷら伊勢屋、そして桜鍋の中江である。

・六地蔵・東禅寺：江戸深川の地蔵坊正元が、宝永 3 年（1706 年）に発願し江戸市中から広く寄進者を得て、江戸の出入口 6 箇所に丈六の地蔵菩薩坐像を造立した。病気平癒を地蔵菩薩に祈願したところ無事治癒したため、京都の六地蔵にならって造立したものである。

品川寺 2.75m 東京都品川区南品川三丁目 5-17
東禅寺 2.71m 東京都台東区東浅草二丁目 12-13
太宗寺 2.67m 甲州街道 東京都新宿区新宿二丁目 9-2
真性寺 2.68m 東京都豊島区巣鴨三丁目 21-21
霊巌寺 2.73m 水戸街道 東京都江東区白河一丁目 3-32
永代寺　不明 現存せず　東京都江東区富岡一丁目 15-1

・目黄不動尊・永久寺：五色不動（ごしきふどう）は、五行思想の五色（白・黒・赤・青・黄）の色にまつわる名称や伝説を持つ不動尊を指し示す総称。東京（江戸）のものが有名であるが、厳密には四神や五色に関連する同様の伝説は各所に存在し、それが不動尊と関連付けられたものを五色不動と称されることがある。

目黒不動 － 瀧泉寺（東京都目黒区下目黒）
目白不動 － 金乗院（東京都豊島区高田）江戸時代は現在の文京区関口江戸川公園付近にあった新義真言宗新長谷寺の本尊
目赤不動 － 南谷寺（東京都文京区本駒込）
目青不動 － 教学院（東京都世田谷区太子堂）　本来の寺名は平井の目黄と同じ最勝寺
目黄不動 － 永久寺（東京都台東区三ノ輪）
目黄不動 － 最勝寺（東京都江戸川区平井）

・投げ込み寺の浄閑寺：浄閑寺が投げ込み寺と呼ばれるようになったのは安政の大地震（1855 年）で大量の遊女が死亡した際にこの寺に投げ込んで葬ったことによる。吉原総霊塔や永井荷風文学碑もある。

・小塚原刑場跡と回向院：江戸時代より　この地は小塚原の御仕置場と呼ばれた場所で、寛文七年（1667 年）刑死者の菩提を弔うため本所（現在の墨田区両国）にある回向院の住職「弟誉義観上人」が町奉行所に願い出て、この地に常行堂を草創した。
後年　本所回向院から独立した。その後 JR 常磐線が敷地内を分断したため墓所が線路をはさんで別れた。
といった場所であるから、安政の大獄の吉田松陰、橋本左内、桜田門外の変の関係者、そしてねずみ小僧次郎吉の墓が残る。そして、前野良沢・杉田玄白・中川淳庵らがこの地で奉行所の許可を得て腑分けに立ち会い、オランダの医学書であるターヘルアナトミアの挿絵等の正確さに驚愕し、当時としては難解なオランダ語の翻訳に勤しみ解体新書を完成させたことを記念した青銅板を石碑がある。ただし、大戦で石碑が大破したので昭和 49 年に青銅板のみを新たにこの場所に設置した。門前には吉展ちゃん事件の吉展地蔵尊も。

・彰義隊ゆかりの円通寺（几号水準点）：彰義隊ゆかりの寺として知られる円通寺。境内には「彰義隊士の墓」や無数に銃撃の跡が残る上野戦争の地にあった黒門がある。箱館政権の大鳥圭介追弔碑と並んで、同海軍奉行荒井郁之助、同従軍医師高松凌雲の追弔碑も並ぶ。彰義隊の戦死者達は「賊軍」として扱われたため、戦死したあと遺体が放置されていたのだが、本寺僧が死を覚悟で供養した。寺号額は榎本武揚の書で、黒門には銃弾の跡が、左手百観音石に几号水準点が、そして江戸の町火消の大親分であった新門辰五郎の碑も残る。

・三ノ輪商店街から都電三ノ輪橋駅：**最後は、**都電荒川線の始発駅「三ノ輪橋停留場」へ向かう、あたりは下町情緒たっぷりの三ノ輪商店街。

コースマップ

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　Yamaoka　mitsuharu　+＊＊＊+